

Educo

地球時代の教育情報誌 エデュコ

No.10 / 2006年 春

人間って制約されてこそ予期せぬ力が
生まれてくるものなんですね。

地球となかよしインタビュー
消えていくふるさとを描き残す

原田泰治 2～3

知っておきたい教育NOW

フィンランドの教育に学ぶ 鹿井良信 4～5
困難に直面する若者へ 宮本みち子 6～7
包括的・継続的な支援を

有田和正のおもしろ授業発見!

6～9

地球となかよしトピックス 村中みんなで子育てを

小岩井彰 10～11

インフォメーション 北から南から

12～13

BOOK REVIEW 4 / コラム 10代心のカルテ その

香山リカ 14

ほっとな出会い 田代大輔 16





地球となかよし
インタビュー

消えていくふるさとを描き残す 原田泰治先生（グラフィックデザイナー・画家）

日本の古きよき時代を描いているのではなく、現実を描いているんですね。日本にはまだいい所がこんなに残されているということをも、一生懸命取材をして、絵で残しているんです。

先生はクロアチア（旧ユーゴスラビア）の素朴画家たちと交流されていますが、最初の出会いについてお聞かせください。

ぼくは東京の美術大学を卒業して、昭和38年に諏訪に戻って来ました。いわゆるリターンです。当時はデザインの仕事がほとんどなく、鬱屈した気持ちでいろいろな仕事をやっていましたが、絵を描きたいという気持ちはずっと持ち続けていました。

そんなある日、朝日新聞で「ユーゴの素朴派」という大きな記事を目にしました。そこにイワン・ラフジン、イワン・ゲネラリッチの作品が掲載されていて、心惹かれるものを感じました。

その画家たちは心の生計のために絵を描くというのです。それぞれ農業、家具職人、靴屋などの仕事を持ちながら、ふるさとをこよなく愛して、自分のスタイルで好きなようにふるさとの絵を描いている。心の生計のために描いているのですから、絵を売ることもしません。

モノクロで掲載されたイワン・ラフジンの絵に心の中で自分のイメージで色をつけながら、表面的なテクニクを真似

するのではなく、そこに流れている思想というが、ふるさとを愛することの大事さを学びました。そして、自分も嘆いてばかりいないで、素朴画家たちと同じように、身近にあるすばらしい信州の四季を描いていつたらどうだろうかと思うようになったんです。

あの時、あの新聞記事に出合っていないければ、ぼくは絵を描いていなかったかも知れませんね。だから、その時の記事は茶色くなくなってしまいましたが、今も大事にとつてあります。

素朴画との出会いが、ふるさと画家・原田泰治の誕生につながっていきののです。

今のように何でもインターネットで簡単に調べられる時代と違って、当時は素朴画やその画家に関する資料が全然手に入りませんでした。一から自分のスタイルを作り上げなければいけなかったんです。どう描いたらいいかわからないから、アメリカのアクリルカラーを買ってきて自分の好きなように一枚描いてみました。すると、自分なりに気に入る絵ができた

んですよ。「これは自分の世界になるのではないか」と思えるような絵が描けた。それがぼくの絵のスタイルの原型になったんです。その絵にも人物の目、鼻が描いてないんですよ。今もそのスタイルはずっと変わっていません。

四季の移り変わり、四季の風みたいなものを自分の絵に取り入れ、できるだけ自然に近づくことを念頭において描いていました。ぼくが生まれ育った信州の自然や、特に四歳から中学一年

までの少年時代を伊賀良村（現・飯田市）で過ごしたことが、ぼくの絵に大きな影響を与えていると思います。

実は、素朴画と出会う前から、伊賀良村の思い出の絵は描いていました。時代から消えいくもの、日本が大事にしなければならぬものをできるだけ描いていこうと考えていたわけです。

少年時代の伊賀良村での経験が、作品に大きな影響を与えているとのことですが……。

ぼくは一歳の時に小児麻痺になり、三歳まで歩けませんでした。四歳の時、家で伊賀良村に疎開するわけですが、開

原田泰治先生 プロフィール

1940年長野県生まれ。武蔵野美術大学卒業。1歳の時、小児麻痺にかかり両足が不自由になる。4歳の時、一家で伊賀良村（現飯田市）に開拓農民として入植する。1964年諏訪市に「ホーコードーデザインスタジオ」を設立し、グラフィックデザイナーとして活動。1982年4月より朝日新聞日曜版に「原田泰治の世界」を連載（1984年9月まで）。1998年7月、諏訪市への長年の協力と貢献によって、市が諏訪湖畔に諏訪市原田泰治美術館を開館。著書に『原田泰治自選画集』『画集「原田泰治が描く—日本の歌百選—」』『絵本「とうちゃんのとんネル」』など多数。



拓農民なので、村の一番高台の荒地だったんですね。ぼくの家から、点在する集落や、左手には飯田の町、屏風のような赤石山脈、その下を母の帯のように蛇行する天竜川がパノラマのように見渡せるんです。足が不自由なぼくは、いつも縁側



●「山古志の春」

ただ、表面的な自然や懐かしいふるさとを絵で描くのではなく、自然の中に慎ましく生きていく人々の姿をきちんと描きこんでいったことが、読者の方々の共感を

得たのかも知れません。そうです。だからこそ、日本の古きよき時代を描いているのではなく、現実を描いているんです。日本にはまだいい所がこんなに残されているというのを、一生懸命取材をして、絵で残しているんです。だから、みんなが手を挙げて、写真家なら写真で、絵描きなら絵で、いろいろなジャンルの人たちが様々な形でふるさとを見守り、発表して

いくということがとても大事なのではないのでしょうか。ひと昔前は、雪が降ると少々まで全部みんなが雪をかきましたよね。でも今は雪かきをしなくなりました。それに、ぼくが結構大きくなるまで、子どもが少々で遊んでいましたよね。今はそういう姿がないじゃないですか。もうひとつ残念なことは、ぼくみたいな足の悪い子や体の不自由な子も必ず一緒に地域で暮らしていましたよね。ぼくは特殊学級に行っていたわけでもないし、伊賀良村小学校で普通の生徒と一緒に育ったんです。そういう交流って、ものすごく大事だと思うんですよ。だから、福祉も大事だけれど、体の不自由な子どもたちだけを集めて暮らしていけばいいというものじゃないんですよ。きちっと線引きができてしまつて、接点がなくなっているのは大きな問題だと思います。学校をバリアフリーにして、普通の生徒の中で育てていけばいいんじゃないか起こらないと思うんです。障害をもった子どもたちが学校に一人いるだけで、みんなが助け合っていかなければならなくなる。そうすると、いじめなんて起きている場合じゃないですからね。ぼくがこんなに元気だかんばつていられるのは、そういう学校に育つてみんなと一緒にやってこれたからなんです。

自然破壊が進み、ふるさとを失われつつあります。一方、子どもをめぐって陰惨な事件が続いたり、世の中全体が病んでいるようにみえますね。

確かに、今の世の中、どこかおかしいし、子どもたちも悪くなっています。しかし、評論家の言葉だけを信じるのではなく、まず、隣の人とよく話をし、なかよくしていくことです。そこが原点だと思います。嘆いてばかりいないで、まず、修復できるところから実行していかなければならないと思っています。

に座ってじつと四季の移ろいを眺めていました。そういう経験を通して、ぼくは俯瞰的に見る鳥の目をいただいたんじゃないかと思うんですね。また、友だちがおんぶしてくれて遊びに行くんだけど、みんなが遊び回っている間、ぼくは動けないから一時間でも二時間でもじつと待っているわけです。その間、自分の座っている周辺の狭い行動半径の中で、野の花やサイダーびんのかげらや蟻の巣など小さな遊び道具を見つけて待っているんです。そういうぼくの遊びから、細かく観察する虫の目をもったんじゃないかと思うんですね。もし、足が不自由でなかったら、ぼくの絵の特徴ともなっている大きく俯瞰して見る鳥の目や、細かく観察する虫の目を身につけることはできなかったでしょうね。そう考えると、人間って制約されてこそ予期せぬ力が生まれてくるものなんですね。

連載を始めた頃は、取材先でその土地の人に話を聞くということもせず、写真をとったり、スケッチをして帰って来るとかという状況でした。だけど、それはだめだということに気づいたんです。その地域の方のお話を聞いて、たとえ五分でも十分でもそこに住んだ気持ちになつて取材しなければいけないと思いました。孫をおんぶしたおばあちゃんがいれば、「雪はどのくらい積もりますか」とか、「買い物はどうしていますか」とかインタビューするようにしたんです。時には縁側でお茶をいただきながら話し込むこともありました。そうすると、パンフレットや郷土史にも載っていない森や川の名前、その由来、言い伝えなどを聞くことができるわけです。

お話の中にはキラキラ光る言葉がちりばめられています。そこで聞いた要素を絵の中にいっぱい入れていくようにしました。その時に、「原田さん、ぜひ春の絵も描いてください」と言われまして、次は必ず春の絵を持って来ますと約束したんです。そして二枚目の絵「山古志の春」(上の写真)が完成しました。

以前、NHKの「さだまさし・原田泰治のアート紀行」という番組で、山古志村を訪ねました。好きなところを二人で旅して、そこでまさし君は歌を一曲作り、ぼくは絵を一枚描くという趣向なんです。が、その時に、冬の山古志村の絵を描きました。ところが、信じられないことに、ぼくが描いた家が中越地震で水没したというのです。そのことを伝えるニュースの中でぼくのことを紹介されたものですが、その絵を持って、まさし君と二人で避難先の長岡の体育館へ駆けつけたんです。すると、みなさんが手を握り涙を流して喜んでくださいました。

朝日新聞日曜版の連載「原田泰治の世界」では、全国47都道府県のふるさとを描き継がれ、大きな反響を呼びましたね。



そういうえば、中越地震で大きな被害を受けた山古志村の絵もお描きになつていますね。

そういえば、中越地震で大きな被害を受けた山古志村の絵もお描きになつていますね。

フィンランドの教育に学ぶ

―世界一高い学力の隠された要因を考える―



北海道教育大学大学院教育学研究科助教 庄井良信

■ストーリーテラーとしての教師との出会い

昨年（二〇〇五年）の秋、私たちはフィンランド東北部（ユマリスキュラ）にある極小規模の基礎学校を訪問した。その学校に、ある女性の教師がいた。穏やかで偉ぶらない姿勢のなかに、どこか芯の強さを感じさせる不思議な魅力の持ち主だった。聞くと、この教師はこの小さな町に二〇年以上も暮らしつづけてきたという。そして彼女は、この地域で有名な「おはなしの語り手」（storyteller）でもあった。

この教師にフィンランドの民衆にもっとも親しまれている叙事詩「カレワラ」（Kalevala）を語ってもらった。そのしみじみとした「語り」に派手なパフォーマンスは一つもなかった。しかし、私たちは、その教師の穏やかな語り、思わずじつと聴き入ってしまった。そこには、力みのない生きた言葉でおはなしを語るものと、安心してその語りに聴き入るもの―その響き合う身体から生まれる「安心と自由」の雰囲気があった（写真①はこの学校の教室にある「揺り椅子」である）。

フィンランドには、学校の教師たちを「国民の蠟燭」（kansankynttilä）にたとえる伝統がある。それは、暗闇のなかで灯りをともし、知へといざない、人を導く存在としての学校教師への尊敬と憧れをこ

めた表現でもある。私には、フィンランドの民衆が「国民の蠟燭」という言葉に託した教師への想いと、ユマリスキュラという小さな町のこの教師の姿とが、どこか重なり合うように思われた。

世界一高いと評されたフィンランドの子どもたちの「学力」の背景には、自分の言葉で自分の物語を穏やかに語り合うというナラティブな言葉の文化があるのかもしれない。

■過密でもなく過酷でもない学び

周知のように、フィンランドは、二〇〇三年の経済協力開発機構（OECD）の国際的な学習到達度調査（PISA）で、読解力と科学的応用力が1位、数学的応用力が2位、問題解決能力が3位という好成績だった。

一般に、学力向上の施策を考えると、私たち日本人は、学校の学習時間を増やしてカリキュラムの密度を高めることや、家庭学習（宿題）などの学習時間を長くすることを思い浮かべやすい。フィンランドはどうであろうか。驚くことに、二〇〇一年のOECD調査によると、フィンランドの七〜十四歳の総標準授業時間は、加盟国のなかでもっとも短い。また、二〇〇四年の調査では、学校外の学習時間も、加盟国のなかでもっとも短いという結果が出

ている。

では、フィンランドの子どもたちは、世界一「過密」なカリキュラムで学んでいるのだろうか。

たしかに最新のカリキュラムは以前のものに比べて厚みを増し、詳細な視pointsの例示も増えている。しかし、そのガイドラインとしての性格や、現場教師の主体性重視の姿勢に大きな変化はない。むしろ、世界からは、国際的な学力の高さはこの柔軟なガイドライン・カリキュラムや、専門性の高い教師の自由裁量の成果ではないか、という関心が高まり、ある意味で、フィンランドの教育政策担当者たち自身が当惑する姿も見られるという。

■未来志向の学力像へいち早く対応

では、フィンランドの子どもたちのPISA好成绩と学力（学習到達度）の高さの背景に何があるのだろうか。

PISAが測定しようとした学力は、知識が高度化し、複合化し、流動化する社会（産業主義社会からポスト産業主義社会への移行）を見通し、二一世紀に必要とされる学力を基準にしたものである。この調査は、単にある学習カリキュラムをどこまで習得しているかということよりも、習得した知識や技能などを、実生活の課題状況でどの程度柔軟に活用できるかということを重視して査定している。それは、「パツと問われてパツと答える力」よりも、「少し時間をかけてよく考える力」を見る評価でもある。

この学力の査定は、抽象的な課題を（自分のいきいきとした「生活経験」とは関係なく）抽象的に解決する力だけでなく、実感のある生活体験から生まれたみずからの経験を、現実世界の課題へと応用する柔軟な力の評価でもあるのである。

このような学力像を前提に、PISAの調査では、フィンランドの学力（二一世紀に必要とされる学習



●教室の揺り椅子



●ヘルシンキの学校の職員室

到達度）が、国際的に極めて高い水準にあると評価されたのである。その背景には、国際的視野に立つ普遍的な（未来志向の）学力像へのフィンランドの人びとの鋭敏な対応があった。

■自己肯定感をはぐくむ学び合い

フィンランド国内では、理数科離れ対策として実施された全教育段階における理数科教育推進プロジェクト（CMAプロジェクト）一九九六年から二〇〇二年まで実施）や、母語力低下対策として始まった学習支援プロジェクト（LCS- Suomiプロジェクト）二〇〇一年から二〇〇四年まで実施）のような国家的学力向上の施策もあった。たしかにそれらも一定の効果をあげたことは想像に難くない。しかし、フィンランドの世界一高い「学力」の背景には、その他にもいくつかの重要な要因があると考えられる。一つは「公正と平等」の実現が、つねに最優先の政策課題とされてきたことである。経済的に困難を抱える家庭の子も、裕福な家庭の子も、その教育条

件にハンディキャップがあつてはならない。だからフィンランドでは、小学校から大学、大学院に至るまで、授業料は原則無償である。九年間の義務教育期間は、給食も、教科書も無償で支給される。大学生は、住居手当や勉強手当を国から受けることができる。返還する必要のない奨学金制度も充実している。その結果、フィンランドの生徒間、学校間、家庭環境などの違いによる学力（学習達成度）の格差も世界一少ない。

二つ目は、「学び合い」を重視し、対話のある学びを大切にしようとしていることである。フィンランドは、社会構成主義という理念から多くの影響を受けている。対話を重視する社会構成主義の学びでは、学習の競争化よりも学習の共同化がめざされる。それは、学べば学ぶほど一人ぼっちになっていくような学びではなく、学べば学ぶほど友だちが増えていくような学びである。それは、「わからない」ことを恐れるような学びではなく、むしろ「わからなさ」がわかる人」が賢い人でもあると考えられるような学びである。

こうした出会いと対話のある学び合いへの志向が、一人ひとりの「学力」を促進する重要な要因となっている。

三つ目の要因は、学びにおける「安心と自由」の保障である。フィンランドの人々がたいせつにしてきた「安心」は、他者とともにありながら、自分が自分であつて大丈夫という自己感覚に裏付けられている。それは、「やればできる」という強迫感覚のあるものではなく、「時間をかければできる」という時間展望のある安心感でもある。

その結果、フィンランドの子ども

たちは、比べ癖がつかない学びのシステム、脅して動機づけられない学びのシステム、穏やかで地道な学びのシステムを保障されてきたのではないだろうか。それが、自己肯定感をはぐくむ学びや、生涯にわたる「自分探しの旅」としての学びにつながり、一人ひとりの人生イメージの柔軟な構想力を形成しているのではないだろうか。

■小さな灯火に語り合う コラボレーションの精神

長い冬、フィンランドの人々は、蝋燭の小さな灯りをとてみたいせつにしている。一九九八年の在外研修のとき、ヘルシンキ郊外のある住宅地では、家族が集う食卓にも、道ゆく人々を照らす窓辺にも、蝋燭の灯りが灯っていた。私がお世話になった大学では、研究室の机の上で暗褐色のキャンドルグラスに包まれた小さな炎が揺れていた。また、地方の教育大学では、正門から玄関まで、数百のキャンドルが雪上に並び、学生や教員たちを学び舎へと導いてくれていた。厳しい冬の雪景色に、小さな蝋燭の灯りの照り返しがとても美しくかった。このような北欧の冬景色を背景にしながら、自分の言葉で語ることでできる教師は「国民の蝋燭」としていまなお深く尊敬されている。

いま、フィンランドでは、だれがだれに勝つか負けるかという「競争」原理ではなく、むしろ穏やかに「共同」しながら学びあう教室で、人格の深いところから学びへの意欲と到達を回復していく子どもたちが生まれている。PISAで注目されたフィンランドの高い学力水準は、自分の言葉で語り合う「共同」の精神を基盤として、教育の機会においても結果においても「平等と公正」を最優先し、教育現場の教師たちの自由裁量と自己決定をたいせつにしてきた地道な教育実践の成果でもあるのである。

困難に直面する若者へ 包括的・継続的な支援を



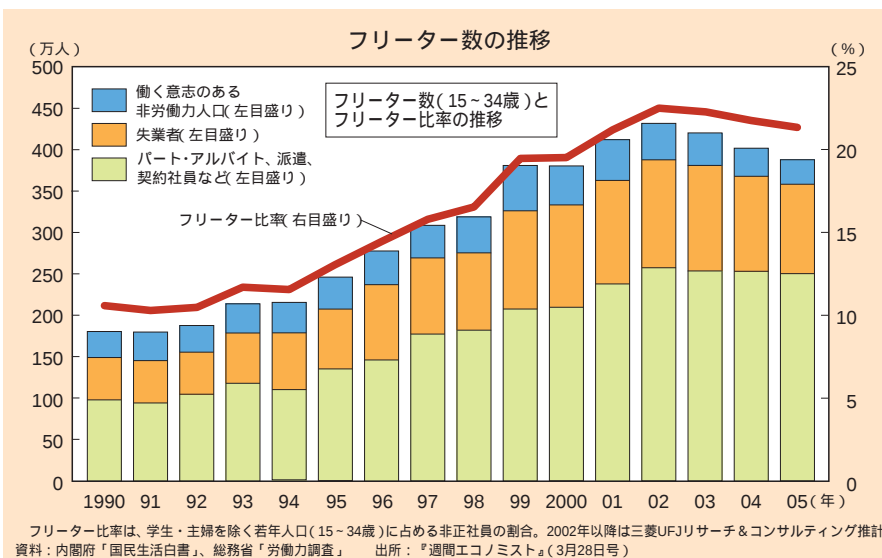
放送大学教授 宮本みち子

新卒者の就職状況は、最悪の状態を脱したといわれているが、安定した仕事で豊富にあった一九八〇年代に戻るわけでは決していない。本格的な雇用流動化社会が始まるうとしている。学校を出たら即、就職して、そこで研鑽を積みながら職業人として成長し、やがて一家を構えて親になるという、工業化時代に形成された、一人前になるための仕組みが消滅しつつある。その結果、一方には高学歴で自由と可能性を与えられた若者が生まれるが、もう一方には、道を見失ってしまった若者や、競争の激化する労働市場から排除されて行き場のない若者も生んでいる。

■工業化時代の枠組みが崩壊

九〇年代前半から二〇〇〇年代前半にかけて、会社の新卒採用者数は激減した。正規雇用は二百万人も減少し、それを上回ってパート・アルバイト、派遣・契約社員などが増加した（下図）。このように、就職氷河期に学校を終えて、非正規の不安定な仕事に就かざるを得なかった若者が、いま二十代後半から三十代前半に大量に滞留している。

政府は二〇〇三年六月に「若者自立・挑戦プラン」をまとめて若年者雇用への取り組みを強化し、就職を支援する「ジョブカフェ」の設置、職業教育の拡充など、具体的方策を実施してきた。しかし、若者



を対象とする近年の調査・研究の結果から、「不況下の就職対策」という短期的な位置づけでは不十分であることが明らかになりつつある。

若者の雇用をめぐる問題は、意欲の欠如や、コミュニケーション能力の不足が問題とされることが多い。つまり、若者自身の問題だという認識である。しかし、この間の統計データをみれば、主な原因は、企業が生き残りのために正規雇用の若年者の採用を減らし、その分を非正規雇用や、派遣社員に置き換えたことに主な原因があったことがわかる。企業経営が改善され、不況から脱出したと喧伝されているが、実は、不安定な仕事に就く就業者を増すことで回復しているというのが実態である。

学卒と同時に職場に入り、そこで教育されて一人前の職業人になり、社会人としても自立していく仕組みは、工業化の時代に完成し一九九〇年代前半まで続いたものだったが、いまやそれが消滅しつつある。このような変化の中で、不利な条件をもつ若者が大きなダメージを被っている。新卒者の就職状況が改善されているというニュースが広がるなかで、すでに不利な状態に置かれた若者の存在が忘れ去られてしまわないことを願う。

近年の各種調査によれば、学卒後一貫して正社員に就いている二十代の若者は半数に満たない。また、大多数が離転職を経験しており、同じ職場に長く勤めようという意向をもっている者も急減している。終身雇用制の崩壊が、若者の意識と行動にもっとも明瞭に表れているのである。

このような社会経済構造の大転換が起こりつつあるなかで、若者の自立のための環境整備が必要となつているにもかかわらず、社会の仕組みは学校と職場が直結していた時代のままで、さまざまな事情でそこからはずれてしまった若者が生きていく仕組みはないに等しい。最近の若者雇用対策の重点が二十代後半から三十代前半にあるのも、行き場を失った

若者が、この年齢層に溜まってしまった結果なのである。欧米先進国の若年者雇用対策が十代後半から二十代前半にあるのと著しく異なるのは、日本で若者問題への気づきが遅かったことに起因している。

■キーワードは「自立」と「活動」

欧米諸国は、一九七〇年代末から八〇年代にかけて、若者の深刻な雇用問題を経験してきた。二〇％に達する高失業率、若年者の貧困化、ホームレス化を前に、多くの調査・研究が行われ、若者政策の転換に影響を及ぼした。九七年の欧州連合（EU）雇用サミットで採択された「欧州雇用戦略」では、若年の就労支援が指針のひとつになり、若年者雇用問題に取り組みよう各国に義務付けた。具体的には、二〇〇二年の末までにすべての若者に対して、失業期間に至る前に「ニュースタート」と呼ばれる教育・訓練プログラムを提供することが盛り込まれた。

この間、EU諸国で若者を論じる際には、「自立」と「活動」がキーワードになった。その背景には、若者が親や国家に依存しないで生計をたてることの困難が目立ってきたこと、それに関連して、何らかの「活動」を通じて社会に参加しているという状態から外れてしまった若者が増加したからであった。学校にも雇用にも就いていない無業者は、まさしく自立できず、社会に参加していないという意味で、若者政策の最重要課題となったのである。

その結果、近年の若年者雇用の手法は、従来とは変わってきている。仕事に就いていない若者に職業訓練の機会を与え、就職へと誘導する従来の手法に対して、仕事に就くためのプロセスを、生涯学習の一環として位置づける傾向が強まっている。

たとえば、直ちに就職するだけの動機付けのない若者には、ボランティア活動や、音楽・スポーツ活動への参加もキャリア形成のプロセスとして認め、

あるいは学校へ戻すなど、柔軟性のある学習プロセスが若年者雇用を成功させるという考え方が主流になってきている。支援の方法も、若者集団を一括して扱うのではなく、一人ひとりの若者の欲求や願望を尊重して設計され、個人ベースのカウンセリングの手法がとられている。若者自身が人生設計をするのを尊重し、生活全般に配慮した支援である。

このような手法に転じたのは、無業の若者が抱えている問題は複雑で、職を与えればすべてが解決するというような単純な認識に基づく手法は効果がないことがわかってきたからである。学校時代の挫折体験、対人関係上の困難、コミュニケーション能力の不足、心身の疾患や傷害、家庭の貧困、離婚・再婚の複雑な家庭事情が原因となつて、労働市場に入つていけない若者に対して、従来の方策では不十分で、学校、福祉、保健、医療、社会教育、警察などが密接な連携をとって、継続的に支援する必要があると認識されるようになった。

■英国の支援政策は13歳から継続

こうした特徴をよく示しているのは、英国で二〇〇一年に開始されたコネクシオンズ・サービスである。ブレア政権の重点政策として、大規模な予算を投じて設置された若者支援サービスで、イングランドに四七か所ある。若者のための、整合性ある一体化した支援戦略といわれている。若者が必要とする支援をひとつに統合しようというねらいから、青少年・若者行政にかかわっていた六つの省庁や専門機関、民間組織、慈善団体などが連携して、コネクシオンズ・パートナーシップという組織を作つたのである。

対象は13歳から19歳で、具体的な支援は、さまざまな専門性をもつパーソナルアドバイザーのネットワークによって行われ、幅広い相談や情報提供、さらに若者の個別ニーズに応じて継続的支援を提供し

ている。パーソナルアドバイザーは学校にも入り、13歳の時点ですべての生徒と面談し、状況を把握する。その結果に応じて、生徒たちとの関係を継続し、特に困難な問題を抱えている生徒には、早期に支援を開始する。生徒の困難の内容は多岐にわたっているからこそ、諸分野のパーソナルアドバイザーの連携が効果をあげるのである。

早期に学校を離れる若者は、ニート（英では求職中の失業者も含む）になる危険性が高い。そこで、安定した職を得ることなく学校を離れる者に関しては、地域のコネクシオンズが引き継ぎ、関係を継続する。このようにコネクシオンズは、ニートの状態にある若者に対しては特に注意を払い、面接の三か月後の状態を把握し、ニートの状態が続いていれば、適切な手立てをとることが、パーソナルアドバイザーの任務となっている。

コネクシオンズ・サービスにみられる、包括性、個別性、継続性を重視した手法こそ、一九八〇年代以降の若者問題に関する検討作業を通して、関係者の間で有効性が認められたものである。

一方、日本では、若年者雇用対策が近年始まったとはいえ、青少年の発達過程の障害を取り除き、なかでも、リスクを抱えている者を長期継続的にフォローアップしながら自立にもつていくという段階には至っていない。進路多様校や困難校の荒廃がニート問題の発生源のひとつになっているという自明の事実さえ、議論は十分ではない。

いま必要なことは、欧米先進諸国の経験に学び、若者政策を国の最重要課題のひとつとして位置付け、教育・生涯学習・就労・社会保障・家族・保健医療などを包括した自立支援方策として推進することである。そのためには、若者が教育・訓練を受ける機会もなく、仕事もしない状態に放っておかれてはならず、自立支援に向けた取り組みが必要であるという社会的コンセンサスを形成しなければならぬ。



有田和正の
おもしろ授業発見！⑩

給食のメニューから食料自給率を考える授業

スムーズに流れた吉野元也先生の授業

教材・授業開発研究所代表 有田和正

1. 給食のメニューから日本の自給率を考える

「今日の給食は何だった？」という問いかけから、吉野先生（東京都目黒区立油面小学校）の授業が始まる。5年生の社会科の授業である。

子どもが、「あれだ」「これだ」という。

すると、教師は「本当かどうか、本物を持ってこよう」といって、その日の給食を教室へ持ってくる。

「どんな食材からできているかな？」と問う。子どもたちは、次々と食材をいう。このあたりの集中ぶりはすばらしい。「物をみることの強さ」を物語っている。

「この中で、日本でどのくらい作っているか。全部なら100%」といいながら下の表を提示する。

子どもたちは、資料を使ってパーセンテージを調べる。

今日の献立

・魚フライ	アジ	50%
	小麦	14%
・サラダ	野菜	82%
	豚肉	53%
・ごはん	米	95%
・みそ汁	大豆	4%
・牛乳	牛乳	69%

数字はあとで入れた↑



子どもたちは調べてノートに書き込む。

「では、小麦の自給率からたずねてみましょう。自給率（%）に合わせて、給食を減らしていきます。」

子どもたちは活発に発言する。確実に調べている。

「アジは50%だから半分くらい」

「野菜は100点中82%残すのだからこのくらいかな」などといいながら、表の%をうめて給食を減らしていった。

「日本は、あまり作っていないなあ」という子どもの声に合わせて、教師は、「日本で作っているものだけだと、給食はこうなっちゃうよ」といって、自給率に合わせて給食を減らしていく。それを見て、子どもたちは、

「うわ。ショバイ！」の声。

「輸入が多いのはなぜだろう？」

「外国の方が安いから」

「外国で残った物をもってくるから、安くもってこれる」

「外国と値段を比べてみよう！」といって、模造紙の資料を提示する。

国産食材と輸入食材の価格比較表

品 目	国産（円）	輸入（円）
米（1kg）	447	306
あじの開き（1枚）	79	58
小麦（1kg）	145	21
豚バラ肉（1kg）	667	553
にんじん（1kg）	230	130
大豆（1kg）	338	39

米は447円→306円、あじは79円→58円、小麦は？
「うわあ、安い！」「大豆は10分の1だ！」

子どもたちは、「値段では比べものにならない！」と驚く。

「ここまでの学習をまとめてみると、ここにどんな言葉が入るかな？」

日本の食料自給率が低いのは からだ

- ・外国にある食べ物が少ないからだ
- ・日本であまり作っていないからだ
- ・外国の方が安いからだ
- ・日本の方が高いからだ

「今日の給食は、国産の食材は何%くらいかな？ いくらくらいで食べられるかな？」と問う。子どもは、500円とか400円とか、いろいろあてずっぽうにいう。

「実は、260円なんだって」

2. 給食で国産食材を使っているのはなぜか

「日本の食材で作ると、これより増えるか、減るか、変わらないか？」

「あまり変わらないなあ」

増える...0人 減る...少し 変わらない...多い

「では、栄養士の佐藤さんに聞いてみましょう」

「今日のアジは、国産のものを使いました。予想と比べてどうですか？」と、佐藤栄養士。

子どもたちは、「思ったより多い」ことに驚いている。

ここで、「給食で国産食材を使っているのはなぜだろう？」という学級問題を設定させた。

- ・国産の方が安全だから（本に書いてあったから）
- ・農薬をあまり使っていないから。これも本で読んだ
- ・外国から運ぶとき、いたまないように農薬をたくさん使う
- ・遠い外国から運ぶので、新鮮さがない
- ・日本のものの方がおいしい。値段が高くて、量が少なくてもいいから、愛情たっぷり、農薬が少なめだから
- ・国産のものはすぐ手に入る。外国のは遅くなる
- ・日本人の味覚に合っている
- ・日本人は手で作っているけど、外国は機械でやるから愛情がない

などなど、いい意見が次々と出てきた。まだ出ていたが、教師が、時間の関係もあって次へ進めてしまった。

「いろいろ言ってるけど、外国は能率がいいって勉強したよね。でも、愛情というのはどうかな。おもしろい考えだね」

油面小の国産食料の給食を提示すると、のびあがってみている。子どもの意欲的な取り組みが、ここからもみえる。

「あしたは、本当にこうなのか、資料を使って調べてみましょう。来週の火曜日に、調べたことを発表し合って、佐藤さんに答えをきいてみましょうね」



食料の自給率

品 目	自給率（％）
米	95
小麦	14
いも類	83
大豆	4
野菜	82
くだもの	44
牛肉	39
豚肉	53
卵	67
牛乳、乳製品	69
魚や貝	50

平成15年食料自給率概算 農林水産省調べ

3. まとめ

下の板書をみてもわかるように、多くの意見が出た。書きすぎて、よくみえないほどであった。こんな板書はまずい。

しかし、子どもたちの調べる力、ノートする力、考える力、いずれもすばらしいものであった。ただ、あまりにもスムーズすぎて、教師に子どもが抵抗したりするところがまったくなかったのは、ちょっともの足りなかった。わたしは、こだわりのある授業が好きだ。それができたら100点の授業といえよう。



村中みんなで子育てを

―長野県青木村のユニークな教育―

青木村教育長 小岩井彰



一人の子どもを育てるためには 村一つが必要だ

長野県青木村は、長野新幹線上田駅から西へ約10km、三方を山に囲まれた、自然豊かな美しい小村です。人口四、七〇〇人のこの村は、平成の大合併の中、自立の道を選択しました。

村内には、保育園、小学校、中学校が一つずつ、いずれも小さな集団です。しかし、この村でさえ、「都市化、核家族化、少子化などによる家庭や地域の教育力の低下」などといわれると、「なるほどそのとおりだわい」と思わざるを得ない現実があり、子どもたちの自然離れと人離れを強く感じています。

昔から青木村には青木の食があり、顔があり、豊かな人とのつながりがありました。今こそそうした村のすばらしい自然や文化を見直し、子どもたちに豊かな自然の中で「人とつながる力（社会力）」を育てたい。子どもたちが多様な人々とじかに接し、人に対する関心や愛着そして信頼感を育てることこそ、人とつながる力を身につけることであり、ふるさとを誇りに思い、国際感覚豊かな

な生きる力の育成につながると考えています。「一人の子どもを育てるためには村一つが必要だ」、そんな意気込みで取り組んでいる村の教育の一端をご紹介します。



村民の学ぶ意欲が子どもを育てる

最初は「学校の敷居は高くてなあ」などといった村のお年寄りが次第に学校に入り、子どもたちと学びの場を創造し始めました。

「昔、勉強する機会がなかったので、ぜひ、中学校で勉強したい」という申し出がありました。今では数学と英語の授業に参加しているお年寄り何人もいます。数学を学んでいる83歳のおばあさんは、タクシーで学校へやってきます。授業への取り組みは真剣そのもので、見事なノートを作成し、子どもたちを驚かせています。先生がおばあさんの質問に窮するようないこともありました。英語の授業では、70歳を超えるおじいさんたちの力を目の当たりにし、子どもたちは、驚きと共に学ぶ意欲をかき立てられています。

今年は、講師として入っていた村の方々

と先生方との懇親会も行われました。「こんなきれいな先生がいたとは知らなかった。来年もぜひ参加させておくれや」などと満面の笑みを浮かべるおじいさんと若い先生が、共に子どもの育ちについて熱く語る場ができました。学校へ教育支援ボランティアとして地域の人々が入るばかりでなく、共に学ぶことで子どもたちの心が育っていると感じています。



子どもの「素」を認め豊かな 放課後の創造を

小学校の敷地に隣接している児童センターは、大切な体験活動の場として機能し始めています。このセンターのモットーは「自分の責任で自由に遊ぶ」です。学校と家庭の間にあって、隙間を埋める大切な時間を子どもたちは自由にのびのび過ごしています。

これからの時期、子どもたちは川遊びに没頭します。泳いだり、魚を獲ったり、火をたいたり、自由な発想で時間を過ごします。今までなかなか見られなかった子どもたちの異年齢集団が自然に



●おばあさんの学ぶ意欲に脱帽



●児童センター、これから始まる放課後の川遊び



●おいしい焼そばの完成。学生グループ「わこうど」による五泊六日の通学合宿



地域で支える子育て 「子どもはつらつネットワーク」

でき、ギャングエイジを謳歌する姿が現れました。自然の中で子どもたちの「素」を存分に発揮できる場ができ上がってきています。

このセンターにも地域の方々が入ってきますし、高校生や大学生のボランティアも入り始めました。自然の中で人とふれあいながら、豊かな放課後が創造されています。

子どもたちの学びを地域で支え、みんなで楽しもうという、青木村子どもはつらつネットワーク組織があります。保育園、学校はもちろん、地域のボランティア団体や個人、学生、行政など約20の団体が所属し、緩やかに連携しながら、人材・情報・場の提供をしています。

その中の学生グループ「わこうど」には、信州大学、長野大学を中心に多くの学生が参加してい



外からの風の導入

ます。五泊六日の通学合宿や村内ホームステイの企画運営、保育園・小中学校の教育支援ボランティアを行いながら、村全体が学生の学びの場にもなっています。村では、このような学生がいつでも村に滞在できるよう、学生専用宿泊施設を用意し、温泉も宿泊も自由にできるようにしました。

昨年度この宿泊施設を利用した学生は延べ二〇〇名、村の教育活動に参加した学生は延べ三五〇名を越えました。学生とのふれあいで、多くの大人が活性化してきました。

昨年度、都会の団体の活動を受け入れ、村の子どもたちも共に参加しました。ガスも電気も水道もトイレもない牧場で行った六泊七日のキャンプでは、村の中しか知らない子どもたちが人の関係を広げ、今まで気づかなかった村の友だちの良さや村のすばらしさを都会の子どもを通して感じる



豊かな人の関係を

きっかけにもなりました。

村の中学生が自然に薪割りをし、チェーンソーを使う姿に都会の子どもはびっくり。村の子どもは、びっくりされたことにびっくり。「自分は案外すごいかもしれない」という思いを持ちました。それが、この子たちの自信につながり、その後の生活態度が一変したとの話がありました。

外からの風の導入は、青木村がすべてを提供するのではなく、協働することを原則としています。そして、互いの違いを知り、それをふまえて、自分自身のすばらしさに気づく場になればと考えています。本年度も引き続き、外の風の導入を続けていきます。

自然の中で多くの人とじかにかわること、子どもたちはもちろん、大人たちも変わり始めています。豊かな人との関係の中に子どもたちの意欲が育ち、さまざまな教育問題の解決の糸口があると感じています。

村全体が子どもに対して温かな関係を築くとき、地域が活性化する確かな手ごたえも感じています。誰もが人生の最初は子どもの時間を過ごします。豊かなこの村で子ども時代を共に創造したいと願っています。

青木村には国宝大法寺三重塔、田沢・沓掛温泉などがあります。また、江戸時代百姓一揆が全国一多発した村でもあり、「義の心」を基に先取の気質に富んだ、いで湯と文化の里でもあります。豊かな自然の中で豊かな人の関係をつなぐ、小さな村ならではの教育を目指していきたいと思っています。青木村においでください。

■ 山形県 ■

地域の歴史・文化に根ざした
全校構成劇鶴岡市立羽黒第三小学校校長
上野由部

本校は庄内平野の南東部、鶴岡駅から北東6kmにある。北東の鳥海山、東南の月山が見はるかすように聳えている。鶴岡市羽黒町は、赤川流域の稲作文化と出羽三山の歴史が永く息づく地である。本校ではこの歴史・文化を素材に全校構成劇を始めて5年になる。

全児童198名一人一人が主人公の全校構成劇は、「学校文化づくり」の一端も担っている。「学校文化づくり」とは、「人」「もの」「事」とのかかわりを大切に活動を展開することで、豊かな自己実現を図る子どもを、地域民と共に育む学校の姿である。

平成17年度は、「生きる・未来を信じて」というテーマで取り組んだ。低・中・高学年別に三つのオムニバス構成とし、全体を見通す「時の旅人」を登場させ、3部構成に一貫性を持たせる。

1学期、校外学習・地域の先生を活用して「ふるさと学習」を低・中・高学年別に行い、劇の素材を探り児童と共にシナリオをつくる。1部（中学年）「いのちの誕生」（明治～昭和に生きたお産婆さん）。2部（低学年）「遅く生きる」（江戸時代相撲取りになった鬼一）。3部（高学年）「共に生きる」（明治の赤川の氾濫と堤防づくり）。2学期、発表会まで2か月足らずの劇練習。合わせ稽古5回、反省と目標を全校児童で確認。台詞・歌・ダンスを織り交ぜた舞台は体育館ステージとフロア半分。時代考証・シナリオの適正・演技指導・大道具小道具・衣装・着付けとあらゆる分野に、組織化された保護者や地域民が主体的に参加し、全校構成劇を完成していく。総時数60～90時間。

子どもたちが全てに主体的にかかわり、保護者や地域民が積極的にかかわることは、本校の目指す「学校文化づくり」の基盤であり特色づくりになるだろう。



■ 北海道 ■

ルールとマナーを身に付けた
コンピュータの活用苫小牧市立明野小学校校長
高松雅弘

本校は、北海道の海の玄関口である工業都市・苫小牧市の東部に位置している。校区は札幌へ結ぶ国道36号線やバイパス道が横断し、苫小牧港や千歳空港にも近接した商業地・住宅地として発展している。また、全国高校野球選手権大会2年連続全国制覇で名を挙げた駒澤大学附属苫小牧高校にも近く、冷涼な気候の中にもたくましが息づく地域である。

本校では、「わくわくどきどき夢いっぱい学校」をテーマに、地域に開かれた特色ある学校づくりに取り組んでいる。特に、コンピュータを活用した学習活動の実際と施設設備の効果的な活用についての教育課題に挑戦し、教職員の創意工夫と自主的な研修を深めながらスキルアップを図ってきた。その成果は、苫小牧市教育研究所研究委嘱校として、毎年開催している公開研究会を通して多くの学校に還流し、小学校段階に相応しい情報教育のあり方を提案してきた。

近年、インターネットをめぐる信じられないような事件が起こり、情報化社会に参画する態度としての情報モラルの指導が緊要の課題になっていることから、本校においても、ルールやマナーの指導のあり方を試行錯誤しながら進めている。4学年では簡単なメール操作を通してルールの大切さに気付かせ、5学年では掲示板の使い方やマナーなどを、6学年ではチャットの体験やマナー、著作権についての指導も取り入れている。また、PTA研修活動の一環として、毎年開かれている「お母さんのためのパソコン教室」では、本校教職員が講師となって活動を支えるなど、学校と家庭が一体となって情報教育を進めている。本校の実践が、加速化する情報化社会を心豊かにたくましく生きる子どもを育てることに生きて働くことを願っている。



■ 愛媛県 ■

「子ども見守り隊」活動中！

～安全な環境づくり～

松山市立余土小学校PTA会長
川添紀明

各地で児童が巻き込まれる事件が相次ぎ、何とか子どもたちを守りたいと、平成16年6月全保護者による「子ども見守り隊」を発足させた。見守り用の黄色のベストを着用して、登下校時や夕方など可能な時間での見守り活動をしている。

当初は保護者の協力が得られるか不安もあったが、予想以上に順調な出だしであった。その後、より充実させるために検討を重ね、現在は校区を三つの地区に分け、各地区ごとに毎日2、3名の保護者が見守り活動をしている。先生方も下校指導時には黄色のジャンパーを着用してくださり、地域の方々にもこの活動が理解されてきた。また、平成17年12月には、地域の見守り隊も発足し、より安全な環境が整えられるようになった。

2年近くの見守り活動の結果、子どもたち自身にも、気持ちのよい挨拶、交通マナーの向上などうれしい変化がみられる。また、保護者の意識も高まり、「自分の子どもだけでなく地域で守り育てたい」「見守り当番の日以外でも、下校時に迎えに出ている」など一人一人ができる活動を心掛けるようになった。

また、「見守り隊」以外の安全対策としては、保護者の意見をもとに、学校とPTAで協議を重ね、「CAP学習会」「登校班による全校一斉下校」「交通安全学習会」「危険マップ配布」など、できることから積極的に取り組んでいる。

このように、学校とPTAとが連携し協力し合うこと、そして保護者一人一人が地域の中で、見守りの輪をひろげていくことが、子どもたちの安全な環境をつくっていくと考えている。学校、そして地域に子どもたちの元気な声が響くことを願っている。



■ 東京都 ■

絆を結ぶ学校づくり

～緑化活動例から～

品川区立品川小学校校長
今村久二

品川は、近世、近代の歴史の窓口である。東海道の一の宿として、開国の嵐の現場として、日清・日露の軍港として、時代の公を支えた民の町である。

品川小学校は、近年の様々な都市再開発まで、それらの推移を間近に見ながら、132年の歴史を刻んできた。大都市にあって、本区には、今や「農」的な第一次産業もなく、したがって伝統的なコミュニケーションはここに育つ子どもたちにとっては皆無に等しい。

そこで本校では、地域と積極的にふれあう「場」の創出に力を入れてきた。子どもとお年寄り、そしてその間をつなぐ大人たちのすべてが、学校を足場に、町をコミュニケーションフィールドにしようと呼びかけてきた。現在は、学校に関わるすべての大人を「品小交友」と呼び、多様な活動を展開している。

特に、土に親しんだり、自然とふれあう場の開発を例示する。「花と緑の品川小学校」を共に実現しようとしてきたのである。これまでのこの内容の活動を列挙すると、緑化隊と品小交友による駅前等緑化活動、品小交友「地域・おやじの会」による自然観察道づくり、屋上庭園の整備、などがある。

近隣の私鉄駅の前には、子どもたちとお年寄りが季節ごとに植え付ける花壇が乗降客を楽しませている。

学校裏の、かつての丘陵地形が造成されて残っているわずかな急斜面は、それでも、校舎の長さ100メートル分の手つかずの緑地である。ここに、アップダウンのある観察道を地域と保護者、教員の手でつくりあげた。短いが、都市の中の山道の出現だ。生活科などで学ぶ子どもたちの歓声が連日響いている。

こうした活動を通じて、年齢を超えたコミュニケーションが町に復活しつつある。



香山リカ 著 『いまどきの「常識」』 (岩波新書)

迷走する社会の姿をあぶりだす

評者 芹沢俊介 (評論家)



思考停止が「常識」を生む。そうした「常識」にわれ先にくみすることで自分を安全圏に置こうとするおびただしい人たち。この本を読むと、そんなあさましい社会像が浮かび上がってくる。

著者が冒頭で取り上げている「あの人はバカ」という自分はバカじゃない」という「常識」。これを支えているのは、「バカ」と「バカ」じゃない自分の二分法である。評者などいぶんバカ、バカと言われてきたので、この「常識」によれば「バカ」の側に位置づけられていることは確かなのだけれど、では自分を「バカ」じゃない自分の側に位置づける人たちの根拠はどこにあるのだろうかといえば、どこにもない。根拠のない二分法は、思考停止の典型的な産物である。

ところで、気味が悪いと思ったことがある。それは「バカ」を連呼する彼らの眼に「真剣」を感じたことであつた。異常事態が起きている、あるいは起きつつあると思った。オウム事件の

ときに感じはじめた空気が九・一一同時多発テロを契機に一気にかたちをとりはじめたという印象である。それを一言で表せばこうなる。味方でない者は敵という単純な二分法と排除の論理。こうした論理がたとえば「障害のある人のことを考えるよりも、まず障害のない人たちの安全や利益を確保しよう」という「常識」になって出現してきているのである。

この本があぶりだそうとしているのは、そのような「常識」のほびこりはじめた、余裕を失って迷走する社会の姿である。

大量に増殖する「常識」のうち、著者が狙上にのせたのは三十。エキセントリックのものもあればそうでないものもあるが、著者はどの「常識」にも居心地の悪さを感じている。居心地の悪さを感じつつも立ちどまって、そんなふうな「常識」に覆い尽くされた社会は、はたしてあなた自身に幸せをもたらすのだろうか、問いかけている。

齋藤 孝 著 『教育欲を取り戻せ!』 (NHK出版)

健全な教育への情熱とは

評者 有村久春 (昭和女子大学教授)



小手先の教育論が横行している。本書はそのモヤモヤを払拭してくれる。一連の齋藤ワールドらしく、随所に驚きと機知が味わえる。新書特有の手軽さと読み易さも手伝っている。

著者のいう「教育欲」の発想がおもしろい。人には必ず存在し、他者を教育したり教育されたりする欲求であるという。それは、性欲や食欲、睡眠欲と同等であり、人間として止みがたい当然の欲であるとしている。人が抱く「自分も相手もよりよく生きたい」とする基本的な欲求であらう。加えて、子どもの個性を尊重するのに、大人は何もしないで、ただ傍観していればよいのか、と指摘する(第一章)。

教育の本来の意味である「引き出す (bring out)」ことを、齋藤流「しだい」を大切にすれば、多くの教育問題が片づくのではないかと提案している。この十数年、日本の教育は「教えることを躊躇っているのではないか、それが、子どもや親の不安定さを生み、自信を失わせているのではないか。

教育欲には使用上の注意があるという(第二章)。無理強い禁物、そして、誘発性のある人と出会うことが大切であるという。ここで、漱石の『硝子戸の中』に登場するある女性の話を紹介している。死を考えた女性に、心に染み入る話をするのである。相手の難しい質問にどのように応じるのか、漱石の心の深さ、他を思う気持ちと行動が表現されている場面である。

また、恋愛論と絡めた思考もおもしろい(第四章)。小説に登場する男女の姿を示しながら、興味深い解説を加えている。学び・教える関係では、そこに互いのよさを感じ合う「転移」が不可欠である。子どもことを真に好きにならなければ、子ども自身も親や教師の教える本物にできない感覚である。

第三章では、教育ママの功罪を説いている。彼の考えに学び、私なりに論じると、次の三つを口にするママは罪である。「こんなこともできないの?」「もう、やらなくてもいい!」「いつまで、。やってるの!」である。

Column

10代心のカルテ その③

香山リカ（精神科医・帝塚山学院大学教授）



最

近はあまり聞かなくなったが、一時は「キレる少年」ということばが毎日のように新聞やテレビで取り上げられていた。

15歳のフウタもそんな少年のひとり。ふだんは口数も少なくおとなしいのだが、まわりの人のちよつとしたことばや態度をきつかけに「カチン」とスイッチが入ったかのように表情が変わる。顔色も青くなり、拳を振りあげ、「デメエ！ ブッコロシテヤル！」といった恐ろしいことばを叫び出す。家では、振りあげた拳を壁や家具に向けることもあった。

最初、母親はフウタは発達障害ではないかと疑い、脳の検査や心理検査を何度も受けさせた。しかし、これといった異常所見はみつからない。「極端に社会性や耐性に乏しい人格だが、目ぼしい器質的異常はない」というのが、どこの医療機関からも下される結論

紹介されて、精神科を受診することになった。

し ぶしぶ診察室に入ってきたフウタは、小柄で中学生にはとても見えない。

「休みの日は何してるの？」ときくと、ポツリと「ゲーム」と答えた。「ゲーム脳でしようかね？」と、母親は心配そうに口にした。

突然キレるゲーム好きのフウタ

心の内面を尋ねてもなかなか話してくれないフウタだが、ゲームの話になると饒舌になった。ゲーム世界では実に辛抱強く、経験値を上げたアイテムを集めたりする。いっしょにチームを組むキャラクターに対して気をつかうやさしさも見られた。「なんだ、けっこういいヤツじゃん。いつもキレるってわけじゃないんだね」と言うつと、フウタは恥ずかしそうに笑った。

バ

ーチャルな世界ではキレずにすむのに、なぜ現実世界ではキレるのか。問題をそこに絞って、フウタと少しずつ話をしていくことにした。フウタは「いつもダメな子」ではなく、ゲーム世界では「とてもいい子」なんだ。そこを強調することを忘れずに話をするつと、フウタも冷静に自分の問題を考えられるようになった。

それから、半年。フウタがキレる頻度は目に見えて減っていった。

「治ったんじゃないくて、もともとのフウタに戻っただけだよ。ゲームのフウタが本来のフウタだったんだから」。そう言うつと、フウタはちよつと不思議そうな顔をした。

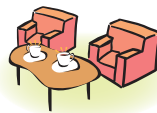
現

実とバーチャルの混同は「よくないこと」と言われるが、「よいバーチャル」に近づくなら、それはそれでいいではないか。私はフウタを見ながらそう思った。

読者のページ

Educo Salon

（エデュコサロン）



●ご意見・ご感想をお寄せください

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10

教育出版 Educo編集部

FAX: 03-3238-6975

E-mail: nakayoshi@kyoiku-shuppan.co.jp

●初めて読ませていただきました。中野良子さんのインタビューは、中国との関係が日本にとって重要な問題であることが市民感覚で語られており、政治・経済とは異なった実験に基づいた話で、わかり良かったと思います。

トヨタ白川郷自然学校は、本人の略歴やトヨタ自動車が関係しているか紹介するとわかりやすいと思いました。

（千葉県 鳴川智久）

●BOOK REVIEWの『子どもが壊れる家』の“現実の子育てでは過干渉が放任のどちらかになりがちだ”は全くその通り。「おもい授業発見」の子どもたちの学びの様子、確かによく考え、よく話す、これも優れた授業者（指導者）ではよく見られる光景だ。

しかし、今の子育て（人づくり）を考える時、何か物足りなさを感じる。それは、子どもたちに言ったこと、やったことに責

任をとらない自己責任回避の姿が多く見られるからである。子どもたちが、自分の意志で判断したり行動したりするのではなく、大人（親）たちの干渉に振り回されていることから来ているのではと思う。

私は、今自宅で囲碁教室・教育サポート室を開設している。囲碁は、思考・創造性、自己判断・自己決定・自己責任を育てる恰好のゲームである。誰の助けも受けずに考えて決断し、その結果、大きな喜びが得られたり、どこが悪かったか考え、次に生かすからである。

（静岡県 袴田進示）

●本当の国際交流は待っていても得られない。現実に飛び込み、身をもって探ること。そして、国際的な場で平和文化を推進するためには「三方の眼差し」をうまく調和させることが大事という中野良子さんへのインタビューは、マンネリ化しつつある現行の国際理解教育への貴重な一石である。

自然との共生、伝統文化との共生、新しい環境技術との共生をテーマに掲げて開校したトヨタ白川郷自然学校の実践は、日本の子どもに不足している気力・体力づくりはもちろん、生きることの基本の見直し、何が本当の豊かさなのかの見つめ直しにつながるもので、これからの日本の教育に求められるひとつの姿を示すものとして大変興味深いものである。（福岡県 武末正史）

●自然界の不思議さ、畏敬の念等をもっと真剣に教える必要があると思います。今年ほど大雪の大変さを味わった年はなかったと思います。東京でも凍りついた道の様子がTVで報じられていましたが、温暖化の影響があるにせよ、子どもたちの目にどのように映っていたのでしょうか。目の現実をしっかりと教材化して、子どもたちに自然愛、自然のたくましさなどをしっかりと教えたいと思います。（北海道 榊原勝三）



折々の季節感を伝えたい

田代大輔さん(気象予報士)

◎田代さんは甲子園を夢見た野球少年だった。高校3年の最後の試合でドラマティックな体験をする。

小さい頃から野球が大好きで、現在も三つの草野球チームに所属して年間20〜30試合に出ています。普段はスタジオにこもりっきりなのでとてもいい気分転換になるんですね。

本格的に野球を始めたのは中学校からで、高校では、ほとんど2回戦負けの弱小チームでしたが、甲子園を目指して練習に励んでいました。高校3年の最後の試合は今でもはっきり覚えています。その試合も2回戦目で、9回

表まで3対0でリードしていましたが、その裏に追いつかれ、なお二死満塁のピンチでライト前にサヨナラヒットを打たれます。僕は一塁を守っていて、点灯されたカクテル光線の中をその打球が二塁手の頭上を越えていくのがやけにゆっくりに感じられ、その瞬間、「あー、終わってしまった」という思いでした。負けた寂しさと、これできつい練習から解放されるという気持ちが入り混じっていました。

しかも、試合後のミーティングでの監督の話が印象的でした。実は僕らの前の試合も強豪同士の見たえのあるシーソーゲームだったそうですが、あ

る人がその試合よりも今の試合が感動的だったと讃えてくださったというのです。その話を聞いて、人の心を動かすようなことをしたんだなあという充実感のようなものがこみあげてきました。忘れられない思い出ですね。

◎幼稚園の年長から30年近く続けているピアノは、生活の一部になっている。

決して上手ではないのですが、ピアノの音がすごく好きなんです。ただ弾いているだけで気持ちがいい。仕事に疲れた時でも、練習で弾き

始めると、ストレスがスッと抜けていく感じがするんですね。野球をやりながら、ピアノのレッスンもずっと続けていて、野球で手を怪我してはよくピアノの先生に怒られましたよ。

長く続けられているのは、もちろんピアノが好きだということもありますが、幼稚園の時からずっと教えていただいている先生の存在も大きいですね。その先生とは親の次に長いお付き合いで、練習よりもおしゃべりの時間のほうが長いこともあります。音楽が専門ですから、テ



慶應義塾大学卒業後、(財)日本気象協会に就職。現在、NHKの番組「おはよう日本」で気象キャスターとして活躍中。

があるし、天気といつか空気が違ってそうなんです。ただ、それに気づくか気づかないだけなのです。音楽で大事なことはリズム感ですが、これは野球にも気象にも言えることです。そういう意味で野球とピアノをやっている、すごくよかったと思います。気象予報というのは将来を読むというところで、それには流れを読まなくてはならない。一番大事なのは、風の予報だと思っています。雲や暖かい空気、冷たい空気も風に流されてくるので、その風の強さや流れが読めれば

天気や気温の予報もできることになり

ます。目に見えない風は、視覚以外の感覚で見極めなければなりません。リズム感も必要ですし、様々な感覚を養わなければならぬと感じています。

◎田代さんは季節感を伝え、天気への興味を喚起する気象予報を目指している。

いまは季節感がなかなか感じられなくなっているのが、雨水とか啓蟄など24節気の言葉を取り上げたりしながら、季節を実感してもらえようという解説を取り入れるようにしています。

それから、忙しすぎる日常の中で心にゆとりをもって身近な天気に興味をもってもらいたいという気持ちがあります。

また、いまメディアは目からの情報が非常に多いので、視覚以外の天気予報ができるというのです。例えば、10mmの雨が降るといふ時は、10mmの雨の実際の音を聞かせるという方法もあるのではないかと。そういった新しい試みしてみたいと思っています。

●ふるさとが消えることは、わずかに残された共同体の消滅を意味する。しきたりやつき合いのわずらわしさから逃げ出した結果、“自己中”がはびこり、人間関係が希薄になってしまった。人は一人では生きられないというのである。ふるさとを守ることは、人と人との濃密な関係を回復することにほかならない。

●原田泰治先生がふるさとを取材して出会うのは、おじいちゃん、おばあちゃんばかりだという。親を残してふるさとを出た都市生活者にとっては、身につまされ耳の痛い言葉である。そして今、“田舎暮らし”が静かなブームだと聞く。ふるさとと帰郷の現象は、人間性を取り戻そうとする意志の現れなのだろうか。

なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。